

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	祐岡 武志
2. 審査委員	主 査：(鳴門教育大学教授) 梅津 正美 副主査：(兵庫教育大学教授) 南埜 猛 委 員：(上越教育大学教授) 茨木 智志 委 員：(鳴門教育大学教授) 西村 公孝 委 員：(兵庫教育大学教授) 森田 猛
3. 論文題目	世界史教育における内容編成論の研究－ ESD（持続可能な開発のための教育）の観点からの再構成－
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 祐岡武志 から申請のあった学位論文について，兵庫教育大学学位規則第16条に基づき，下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成31年2月23日（土） 15時00分～16時00分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス講義室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 (1) 論文の構成 序 章 本研究の意義と方法 第1節 研究主題 第2節 本研究の意義と特質 第3節 研究方法と本論文の構成 第I部 世界史教育の課題と世界史教育内容編成論 第1章 世界史教育の課題 第1節 世界史教育の特質と意義 第2節 世界史教育の現状 第3節 世界史教育の課題 第4節 改革を目指す世界史教育の視座 第2章 世界史教育内容編成論研究の意義と構想 第1節 市民性教育としての世界史教育内容編成の意義 第2節 改革を目指す世界史教育内容編成の類型 第3節 市民性教育としての世界史教育内容編成の構想 第3章 世界史教育内容編成論の方法 第1節 ESDの概念 第2節 ESDの観点からの世界史教育の改善</p>

第Ⅱ部	E S Dの観点からの世界史教育カリキュラム編成論
第4章	グローバルラーニングのカリキュラム編成の論理
第1節	グローバルラーニングのカリキュラム編成の特質
第2節	グローバルラーニングが示唆する世界史教育カリキュラム編成の原理と方法
第3節	グローバルラーニングの意義と課題
第5章	E S Dの観点からの世界史教育カリキュラム編成
第1節	E S Dの観点からの世界史教育カリキュラム編成の原理と構成
第2節	「現代の諸課題」に基づく歴史の遡及的探究学習
第3節	E S Dの観点からの世界史教育の授業構成論
第Ⅲ部	E S Dの観点からの世界史教育内容開発
第6章	「環境」領域からの教育内容開発－「近代日本の産業発展」－
第1節	授業構成の論理
第2節	単元「近代日本の産業発展」の授業モデル
第7章	「経済」領域からの教育内容開発－「産業革命とアフリカ」－
第1節	授業構成の論理
第2節	単元「産業革命とアフリカ」の授業モデル
第8章	「社会」領域からの教育内容開発－「中東世界の宗教対立」－
第1節	授業構成の論理
第2節	単元「中東世界の宗教対立」の授業モデル
第9章	学習評価論と授業評価論
第1節	学習評価論
第2節	授業評価論
終章	本研究の成果と課題

(2) 論文の概要

本研究は、世界史の教育内容全体をつらぬく観点として、「Education for Sustainable Development (E S D: 持続可能な開発のための教育)」に着目し、現代を起点とする世界史教育内容編成の再構成を目指している。それは、現在の世界史教育の課題は何か。そして、それはどのような方策に基づいて再構成されるべきかという問題意識に基づく。その中で、E S Dの観点に着目し、歴史の遡及的探究学習を提案することで、世界史教育内容編成の再構成を試みている。

本研究における主たる内容と成果は、次の5点にまとめることができる。

第1は、現在の学習指導要領地理歴史科「世界史」の課題を分析し、改革を目指す世界史教育の原理を明らかにすることで、市民性教育としての世界史教育内容編成論の意義と構想を示したことである。これまでの世界史教育研究が、従来の教育課程に対しては付加的アプローチによる内容開発にとどまることを指摘し、変革アプローチによりカリキュラム編成を含めた世界史教育内容全体を再構成することで、その課題の解決を目指した。

第2は、E S Dの観点を世界史教育に導入する先行事例としてグローバルラーニングの事例集に着目し、そのカリキュラムフレームワークの分析から、E S Dの観点を導入する世界史教育カリキュラム編成の原理と方法を明らかにしたことである。特に、E S Dの観点は、「環境」「開発」「公正」のS Dの3要素の関係から成り立ち、かつ「公正」を軸とすることと、「現代の諸課題」に関わる教育内容を扱うことで過去の歴史事象を遡及的に探究し、学習者の認識を現代の価値観で問い直すことがE S Dの観点に基づく教育内容開発につながることを論じた。

第3は、先のカリキュラム編成の原理と方法に基づき、E S Dの観点からの世界史教育におけるカリキュラム編成論とカリキュラム開発を具体的に示したことである。現在の世界史教育が抱

える課題を踏まえ、その改善の視点としてESDを導入することで、ESDの観点からの世界史教育の原理を示した。そして、ESDの領域、構成概念、国内外の事例を参考に、「現代の諸課題」に基づく世界史教育内容の編成を試みた。

第4は、カリキュラム編成論に基づいた授業構成論から、ESDの3領域「環境・経済・社会」に関わる具体的な単元、「環境」領域では「近代日本の産業発展」を、「経済」領域では「産業革命とアフリカ」を、「社会」領域では「中東世界の宗教対立」を、それぞれ開発したことである。これらは、3つの領域からESDの特質に迫るもので、世界史教育に新たな主題学習のあり方を提示した。

第5は、「現代の諸課題」から導出した世界史教育内容に則し、ESDの「環境」「経済」「社会」の3つの領域に関わる単元の授業実践と分析から、学習評価と授業評価を行ったことである。それぞれの授業では、生徒の価値観の変化を促すためのグループワークや議論を導入することで「意思決定」の学習プロセスを組み込み、市民的資質の育成を図ろうとした。

2. 審査経過

論文公聴会に引き続き行われた審査委員会では、論文内容について質疑が行われた。審査委員会では、本研究について、ESDに焦点をあてた現代の諸課題の形成に関わる近現代史の世界史教育の内容構成論と「歴史の遡及的探究学習論」というその教育ならではの学習方法論を提案したことが、特質すべき成果であると高く評価された。そうした基本的な評価を踏まながら、主要な質問は、以下の7項目であった。①ESD教育の目的・意義について。ESDは、それ自体に理念があり、その教育は価値的・道徳的な意義に収斂しがちである。そうした中で、市民性教育の中核目標である、公正な判断力や批判的思考力、あるいは議論する力が達成されると考えるか。②世界史教育においてESDを観点とすることの意義について。歴史においてESDを扱う射程が狭いのではないか。例えば、中世ではESDは扱えないのか。扱えたとすれば、どのような扱いが可能か。③先行研究の検討について。ESDに研究の視点が行きすぎていて、社会科教育学における歴史授業研究の成果の検討と整理が不十分ではないか。④主題に関わる本開発研究の基本的な枠組みをなす「内容編成論」をどのような位相で捉えているのか。カリキュラム編成論が中心か、単元（授業）構成論が中心か。⑤学習原理について。「概念の理解」→「課題の探究」→「決断・行動」という学習の原理と過程が示されている。ESDの観点からの世界史教育において、「概念」とは何を指すのか。「行動」につなげることは、世界史教育で可能か。⑥内容編成の観点に「環境」「経済」「社会」の3領域が取り上げられているが、SDを視点に現代の諸課題の解決を展望する時、「政治」を対象としなくてよいのか。⑦学習評価について。学習の有効性を、1単元の実践から、「現代への諸課題の解決の視点形成」「自ら未来形成に参加する姿勢」を評価観点として、本当に評価可能なのか。これらの観点は、1単元の実践というよりも、教科・科目の学習を通じて長期的なスパンで評価されるべき観点ではないのか。

祐岡氏は、これらの質問に対して、研究の成果と課題（限界）を整理・峻別しながら、研究の目的・先行研究の整理・学習原理・内容編成・授業の実践と評価の各レベルで適切かつ明確に回答した。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、祐岡武志の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。